

信頼されるユリ農家を目指して

土佐市花卉農業協同組合

土 居 智 博

経営の概要

私は高知県高知市の春野町で、オリエンタル系ユリ（OT系含む）、LA系ユリ、そして水稻を栽培しています。ここ春野町は高知県の中心部に位置し、目の前には太平洋をのぞむ、日照量の多い温暖な気候の土地で、キュウリなどの施設園芸の盛んな地区です。

現在の経営は、父を主軸として、母、私、妻の四人で行っており、夏場は水稻を作り、秋から初夏までユリの栽培を行っています。現在の栽培面積は、水田60a、施設40a（AP30型ハウス10aが2棟、AP30型ハウス17a、SRH型ハウス3a）になり、施設では年間で2～3回植え替えを行い、LA系ユリを

3万～4万本、オリエンタル系ユリを13万～14万本栽培しています。

我が家の施設園芸の歴史は、昭和35年頃より、祖父の代から始まります。当時、施設の面積は10aで、竹幌施設によるキュウリの栽培、昭和40年には木造合掌ハウスに。その後、経営は父に代わり、昭和50年の構造改善事業により施設の面積は50aのAP型ハウス、SRH型ハウスになり、キュウリ、ナスを栽培します。昭和63年に野菜の栽培をやめ、鉄砲ユリの栽培を開始。平成15年、16年にはAP型ハウスの老朽化により、AP30型ハウスへと建て替え、現在に至ります。

現在出荷している土佐市花卉農業協同組合（以下、土佐市花卉農協）への加入については、当時、地元の



写真1 ハウス全景

J A高知春野にユリの花卉部会が無かったため、春野町の隣にある土佐市のユリ切り花専門農協である土佐市花卉農協へ加入しました。

土佐市花卉農協のある土佐市管内はユリの生産農家が多く、カサブランカで有名なJ A土佐市高石支所をはじめ、戸波、波介、新居など数多くのユリの部会があり、冬から春にかけての市場における一大産地です。

はじめに

私は小さい頃からハウスの中で遊び、トラクターやコンバイン等に乗せてもらったり、楽しそうに仕事をする父母の背中を見て育ってきました。そのせいか、農業に対する違和感もあまりなく、姉と妹に挟まれた長男に生まれた事もあり、「将来的にはやらないといけないのかな」くらいには思っていました。

そこで地元の農業高校に進み、千葉大学園芸学部園芸別科花卉専攻に入学しました。なぜかという、父が園芸別科の野菜専攻を卒業していたこともあり、話などを聞くうちに行きたくなったのと、周りの卒業生からも、実践的な農家を目指すなら別科がいいとの事だったので入学を決意しました。入学してみると内容の濃い授業に実践的な実習、そして出会った仲間達、本当に多くのことを学ばせていただきました。そして、別科花組を修了し、実家に帰り就農に至ります。

就農から現在まで

実家では、家の農業の手伝いからスタートしました。この頃は鉄砲ユリをメインにした作型でした。鉄砲ユリの作型は球根の入っている箱や切り花を入れた出荷箱が重たく、球根の冷蔵処理なども自宅でやっていたためかなりの重労働でした。この頃から母の腰痛が悪化してきた事もあり、少しずつオリエンタル系ユリを増やしていきました。

就農一年目は球根の事などまったくわからず、父がすべてをこなしており、指示がないと何もできない状態でした。この頃思ったのが、学校の実習は当時、しんどい！ と思っていましたが、今考えてみれば楽をさせてもらっていたのだなと痛感しました。

二年目以降は、鉄砲ユリを栽培のベースにしつつ、オリエンタル系ユリの球根の発注、切り花の選別、調整、箱詰めなどを任されるようになり、少しは生産者らしくなったような気がします。ほかにも、市場の視察、他の生産者の圃場見学など、いろいろな人との出会いがあり、人の顔と名前を覚える時期だったように思い



写真2 芽出し処理



写真3 定植中

ます。この頃から別科の実習で習ったように、栽培状況などをノートにつけるようになり、わからないことがあった時は見直すようにしています。

就農三年目、別科花組で同級生だった妻と結婚。農業を手伝ってもらえるようになり、もっと頑張っていこうと自覚するようになりました。その後、母が腰椎間板ヘルニアになり、入院、手術。この翌年くらいから徐々に鉄砲ユリを減らしてオリエンタル系ユリ主体の栽培に変わっていき、就農九年目現在は、オリエンタル系ユリ、L A系ユリの栽培を行っています。

ユリの栽培について

ユリの球根には鉄砲ユリなどに代表される国産球と、オリエンタル系ユリ、L A系ユリなどに多く用いられるオランダ産球根、そして、南半球（ニュージーランド、チリ）産球根に分類されます。

国産球の鉄砲ユリの球根については、鹿児島県の沖永良部島で作られている“ひのもと”が大半を占めています。しかし近年では種子から栽培する新鉄砲ユリがあり、オランダでも鉄砲ユリの球根をオランダ鉄砲ユリとして作られるようになってきています。ちなみにオリエンタル系ユリでも国産球はありますが、オランダ産の小さい球根を日本で養成したものです。

オランダ産、南半球産球根に関しては主にオリエンタル系ユリ、L A系ユリで使用される輸入球根です。オランダ産の輸入開始は1月からで、南半球産は10月頃からの輸入になります。

高知での作型だと夏の植え付けになるので、オランダ産の球根を球根会社で冷凍保存しておいたものを解凍、芽出し、順化处理をしたのち定植します。品種にもよりますが、オリエンタル系ユリで解凍から3～4ヶ月程度で収穫になります。L A系ユリは2～3ヶ月程度で収穫になります。

この作型で使用する球根はかなり冷凍期間が長いため冷凍障害が発生するリスクが高くなります。冷凍障害とは長期冷凍によって起こる現象で、ブラックノーズ（芽無し）、花蕾数の減少、奇形花の発生、球根のカビ、腐敗などが発生します。そこで、冷凍障害の出にくい品種を選定し、カビや腐敗球の除去、芽出し処理を行いブラックノーズの除去を行います。なお栽培を開始する時期の8～9月は気温が高いので暑さに強い品種の選定を行う必要もあります。

10月になると南半球産の球根が輸入されてくるので、そちらを利用するようになります。収穫が最も多くなる時期は厳寒期が中心です。

オリエンタル系ユリは、鉄砲ユリやL A系ユリと比較して生育適温が高めになるので、二重被覆を行い、重油ボイラーを使用し加温を行います。しかし近年では、重油代が高騰しており、コストの削減をするため、三重被覆の導入やヒートポンプの設置も検討中です。

選別については、鉄砲ユリ部会では共販なので取り決めがあるのですが、オリエンタル系ユリ、L A系ユリに関しては個選個販なので各々が選別をし、好きな市場へ送ることができます。私は大阪、京都を中心とした出荷で、あとは名古屋、東京にも少し送っています。

出荷の方法については、L A系ユリで10本、オリエンタル系ユリは5本で一束にしてスリーブに入れます。その後水揚げをしたのち箱へ入れ、運送中に動かないように足元をガムテープで固定し、梱包、出荷になります。一箱あたりの入り数は、L A系ユリで40～50本、オリエンタル系ユリで20本（カサブランカ等の横向くタイプやボリュームの大きいタイプだと10～15本）です。

現在、我が家のオリエンタル系ユリの主軸となっている品種は“シベリア”です。カサブランカは横を向くのに対し、枝打ちが上向きで、少しコンパクトなタイプの白色のユリで、葬儀、婚礼、花束等、多用途に使われる品種です。次に多いのが“ティアラ”という品種で、花色はピンクで花粉の出ないものです。ただし、長期冷凍に強くないので南半球産の使用からに限られます。他にも様々な品種を作っていますが、毎年変化していくため、すべて書いていたら書ききれないので省略します。

市場でのオリエンタル系ユリの取り扱い、カサブランカ、シベリア、ソルボンヌの3品種が約7割以上を占める状況になっています。上記3品種は球根取扱量が多く、そのため花屋や仲卸業者は、年間を通じて生産量が豊富で、特性もよく分かっており、使い勝手が良いのでこの3品種を使用します。

毎年いろいろな新品種が出てきていますが、新品種は球根輸入量が少ないため、継続した出荷が難しく、また使用した事のない花は水揚げや開花の特性などが分からない等が考えられます。

しかし上記の3品種ばかりでは経営が単調になりやすく、また新品種も欲しい花屋もいます。新品種を栽培する場合は市場にサンプル品の提供を行って花屋や市場から感想を聞いたりします。生産する側も栽培しなければ特性も分からないので、少量を作付けし、特性を調べるようにしています。

最近では八重咲きタイプのユリも出てきているので取り組んでみたいとも思っています。

収穫が終了した初夏から真夏にかけてハウスの中を片付けた後、土壤の消毒を行います。少し前までは臭化メチルを使用してきましたのですが、オゾン層の破壊等から使用が禁止になり、近年では真夏の太陽光と暑さを利用したサウナ処理を行っています。

方法としては、栽培が終了した圃場にバーク堆肥やピートモス、ふすま（小麦の糠）等を散布し、トラクターによる混和、灌水後、土壤をマルチングし、ハウスを閉め切り、温度を上げます。現在、この消毒方法で問



写真4 新品種のユリ

題はないのですが、高品質なユリを栽培するため、土壌蒸気消毒機の導入も検討中です。

課題そして展望

課題としては、現在経営の主体が父なので将来的には経営移譲も進めて行くようにする事。また、組合などでは若干活動が少なくなっているため、市場や花屋、球根会社、地元産地、県外産地の視察を行い、意見や情報交換などを活発にしていきたい。現在の出荷形態が個販なので選別が各々違うので目慣らしを今まで以上に行い、等階級、選別を合わせるようにし、市場における信頼を得るようにしていきたい、と思っています。

昔は輸入球が少なかったため、作れば売れる時代で



写真5 八重咲きのユリ

したが、現在は球根輸入量、そして生産する産地や輸入切り花も増え、淘汰される時期になってきています。これからはいかに高品質なユリを作るかを生産者も勉強、努力をして、消費者や市場関係者に「この花やないといかん！」と毎回使用してもらえるよう継続出荷を行い、中身を見ればその人の顔が浮かぶような、この先何十年と続く信頼されるユリ農家を目指していきたいと思っています。

最後に一言

ユリを栽培することも大切ですが、やはり夫婦が仲良く、楽しんで経営していくことが一番だと思います。父と母をお手本にし、私たち夫婦も頑張っていきたいです。